

企画展「相撲の錦絵と江戸文化」

江戸東京博物館(両国) 2021.07.17~09.05



江戸時代、相撲観戦は庶民の娯楽として広まり、プロ力士集団の活躍により18世紀末頃に隆盛を極めた。この頃、時を同じく黄金期を迎えたのが多色刷の木版画「錦絵」で、役者絵や美人画の発展に伴い、それまでの画一的で素朴な相撲版画から、力士毎に異なる体形や顔の特徴を捉えた相撲錦絵が登場した。

この力士の姿や相撲観戦の賑わいを臨場感たっぷりに伝える相撲錦絵は、興行の熱狂を伝えた立役者であり、スター力士が人気を誇るためになくてはならないものであった。本展では、相撲博物館と国立劇場の協力を得て、相撲錦絵を中心に江戸の相撲の多様な魅力を紹介している。

<展示構成>

第1章 黄金期の幕開け

18世紀末には強豪力士を格付ける「横綱」が登場し、世間を沸かせたのが初の横綱力士「谷風梶之助」(1750~1795)とそのライバル「小野喜三郎」(1758~1806)で、画伯「勝川春章」(1743~1792)とその一派は、彼らの個性を捉えた似顔絵や取り組みの光景を描き興行の熱狂を伝えた。



勝川春英《横綱授与の図》



勝川春英《小野川・谷風引き分けの図》

第2章 力士と絵師の協奏

第3章 相撲と錦絵と都市・江戸